

会員の皆様、新年おめでとうございます。

20世紀も終わりに近づいておりますが、飛躍的に人口が膨張し、世界の大きなうねりの中で、人間の社会と経済による力が変化し、地球は大きな危険をはらんでまいりました。

また、昨年は和歌山の砒素事件、拓銀・山一証券の倒産、長銀問題、ヘツジファンドの破たん、失業者の増大など暗いニュースが多く、日本は特に深刻な状況にあります。本年は、世界、特に日本の指導者、有識者の英知により、この難局を克服していかなければなりません。環境問題も経済と同様に次々と新しく、課題が山積されつつあります。

★ 「環境主義」は、経済を否定したり、過去の時代に戻ろうというのではなく、技術・経済・文化・教育等の相互活用により、大気・水・緑・土の環境を守り、地球と、生物、人類が永く生存していくための方策を打ち立て、実行していくことであります。

★ 「複合汚染・複合毒性」

いまだ未知の部分が多く、解明されていない現状にあります。人工、天然の化学物質は、1800万種類もあり、このうち、人間がこの100年間に作り出した人工物質は約300万種類で、その中の約30万種類が生産され、消費されています。このうち、有害性のはっきりしたものだけでも5万種類にも及んでいます。

これらの人工物質どうしの、また、人工物質と天然物質との複合毒性作用を検討し、適切な警告と改善を早く確立しなければなりません。

★ 「環境ホルモン」(内分泌攪乱化学物質)

1950年代; DDT、BHC等、1960年代; PCB等、1970年代; 合成エストロゲン等、1980年代; ダイオキシン類等が、各年代の代表的な環境ホルモンです。一般的には、農薬・プラスチック添加剤・可塑剤・船底塗料・界面活性剤・医薬品原料及びそれらの中間体の一部が、環境ホルモンの疑いがある物質とされています。

環境ホルモンにより、野生生物の群れの縮小、メス化現象、人間の生殖器の異常や腫瘍発生の増加等が問題になっております。我々が出来ることは、不必要に化学物質を取り込まないこと、環境中に不用意に化学物質を放出しないことであります。

★ 「濃縮作用」

有害物質や人工有害化学物質が不用意に放出・廃棄されていますが、これらが、田畑や川、海へと流され、植物や、水草・海草・プランクトン・小魚・魚等に濃縮され、それらの植物や生き物を食する生物や人間の体に濃縮されて、それらの子孫は絶滅の危機にさらされる危険が大きくなっております。

★ 「共生」

地球上の生物は、それぞれお互いに深いつながりをもって何億年もかかって育て上げられてきましたが、それらの良い共生関係が、人間が作った有害物質によって破壊されようとしております。遺伝子レベルの先端技術の進歩により、生物の種や、種の環境がきわめて重要視されるようになりました。今後は、生物(人間を含め)の共生のしくみを解明するのみならず、これらの増進を進めていかなければなりません。

本会の目的にもありますように、環境と、科学・経済・文化を向上調和させ、人類の永続的な生存と共生のために、企業倫理を確立し、各個人がモラルの向上と共に環境に対する責任と義務を果たさなければなりません。

ハート2000を迎えるにあたって(2000年 20号)

共生・持続・調和

代表理事 安立 一郎

私どもハートの会は発会準備に2年余の時を費やし、平斥牖年に創立されました。以来、役員、会員のご協力を得ながら環境に関する総合的な調査、情報の収集それらの提供及び環境思想の普及啓発など幅広い活動を進めてまいりました。

グローバルな地球環境、ローカルな環境を良くするとともに、ものの豊かさよりこころの豊かさをもった人間形成のために、人間教育と意識革命を心がける必要があると考えております。

ミレニアム(1000年紀)の2000年を迎えるにあたり、思えば、1000年前、今日の文明の発展や人口の増加は恐らくは誰も予測し得なかったことでしょう。近々100年前をふりかえって見たとき、現在をどのように予測していたでしょう。特に当を得た予言を列記して見ますと

天然色写真通信：外国の状況を早取写真で通信テレビ電話：電話口に対話者の画像を現出 高速の移動車：東京一神戸間2時間半、世界一周は7日要すれば足りる エアコン：暑寒を調節する為に空気を送る機械等々であります。しかし、今日の人口爆発や地球、人類の環境悪化については、予言では少しもふれてはいません。この僅か100年の変化は、地球と人類及び他の生物の未来を危機におとしめています。

あと1年で21世紀を迎えるにあたり、人類の遠い未来、地球が消滅する(約30億年後)まで人類が生存しつづけるための方策を、これから100年の間に打ち立てなければなりません。

地球上に存在するすべての生物は、A、T、C、Gというわずか四つの塩基でできた共通の遺伝子でつくられています。人間の場合、成人の身体は約60兆個もの細胞からなりたち、その細胞1個1個の核に、二重らせんのひも状の同じDNAがたたみこまれています。このDNAには、30億対の塩基が並んで、約10万個の遺伝子が作られ、それによって細胞の機能が営まれています。

塩基対、遺伝子の数は異なっても、すべての生物は共通の遺伝子構造と機能によってその生命活動を維持しているのです。そこに共生の重要性が見出されます。

地球上で最も見事な「共生」を行ってきているのは、何億年も生きつづけている昆虫です。これは他の生物と非常に良い共生関係をつくっているからです。人類もこれを見習うべきではないでしょうか。

世界の先進国は、環境の産業化によりやく乗り出してまいりましたが、大量生産、大量消費、大量廃棄の現状では、今後100年も現在の繁栄は継続できず、このままでは、人類は200年生存しつづけることさえできなくなるのではないかと危惧されています。

地球と人類生物の持続性を維持するためには、環境負荷の少ない生産をすること、即ち、全エネルギー消費量を減少させること、更に、エネルギー源の転換が必要になります。太陽熱、風力、地熱、海流発電等の大幅な、積極的な利用推進を図らなければなりません。

特に新しい産業として、炭酸ガスを放出しないシステムをつくるのが緊急の課題とされています。炭酸ガスが増え続けると、近い将来、地球上に生物は生存できなくなる恐れがあります。

人類の危機を救うには、上記の実施とともに、陸地の緑化により大量の炭酸ガスを酸素に変える必要があります。

先進国の環境問題としては、

1960年～1975年：公害防止

1976年～1990年：環境アセスメント

1991年以降：環境管理

と変遷してまいりました。2000年以降は、「ISO14000シリーズ」を環境の道しるべとして、全産業がこれを取得し、順守することによって、人類と生物の維持・共生・調和の実現に努力しなければなりません。